



北海道バスケットボール協会

指導者育成専門委員会

2009/09/02(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 57

## 平成21年度 第64回国民体育大会北海道予選会を終えて

8月14日(金)～16日(日) 札幌市 江別市

北海道バスケットボール協会  
指導者育成専門委員会 前野和義

今回、国体道予選会の総評を担当することになりました前野です。選抜チームの観点が難しく、また少年と成年のゲームが混在し客観的に見るのが困難な観戦状況でした。雑ばくで思いつくままの感想になりましたが述べさせていただきます。

例年でありますが、指導されるコーチの方々は大大会に参加するにあたり、選手の選考から始まり、強化のための練習スケジュール作成、自チームの練習と並行しながら選抜チームの育成と大変なご苦労をされた中での参加であったと思います。また時期的にはお盆という忙しい中、大会運営に当たられた道協会の役員の皆様、熱い体育館でのオフィシャルやモッパーの高校生の諸君、そして全道各地から集まられた審判員の方々、『本当に皆さんご苦労様でした。』

参加するからには、北海道代表としてのユニフォームを着て、本大会へ臨みたいと願うところではありますが、地区によっては参加すること自体に、大きな意義も持たせていることも現実です。200万都市を有する札幌協会、数十万の中堅地区協会、そして数万の地方地区協会、それぞれに選手密度の差がある中で選抜チームを編成するわけですから、そこに当然この大会に臨む目的意識の違いも出てくるものと思います。

地区によっては、ゲームにならない得点の差が出てきます。そこで、それぞれの選抜チームのコーチの皆さんに聞いてみました。『これだけの点差が出れば、参加することが逆に選手の今後のモチベーションにマイナスになるのでは?』と率直に話をしました。しかしコーチの皆さんは口を揃えて『本番の点数には表すことが出来ない沢山の収穫があり、結果よりもその過程に大変意義を感じています。チーム事情により、選抜チームとしてこの全道大会にしか体験できない選手もおり、地区の普及と強化に大きく貢献しています。選手も次の目的意識を持つことができ、その様なダメージはありません。また多くの指導者がチーム強化練習に参加でき、若い指導者の育成にもつながっています。』と話していました。どちらにしても、この国体道予選会が代表選考会であると同時に、各地区の競技力の向上と普及に大きく貢献出来ることが、主催されている道体協や道協会の大きな主旨でもあらうかと思われまます。

今大会は少年男子『旭川選抜』が札幌選抜を破り代表権を獲得しました。他地区が札幌選抜に勝利したことは31年前の帯広選抜以来のことです。また、少年女子では平成16年の帯広選抜が優勝したことも31年振りのことでした。札幌以外の地方勢が、国体道大会で優勝することは、大変稀なことであり困難を極めることだと思います。打倒札幌選抜が具体的な目標になり、越えなければならないハードルになるわけです。しかし札幌が勝つにしても、地方地区が勝つにしても、北海道代表が高いレベルで戦えるよう選手養成とチーム力の強化を目指していかなければなりません。平成18年度の成年男子旭川選抜が兵庫国体で準優勝という実績を作ってくれことを忘れてはいけません。参加条件がどう変

わろうとも、北海道が全国制覇をすることを願い、ミニ、ジュニア、高校、クラブ、実業団が心を寄せて、日々の活動に取り組むことが最も大切な事だと、今大会を通じ切に感じたことでもあります。

成年女子は札幌のアカシアをチームの軸として選抜チームを組み、大鷹選手（筑波大）を筆頭に力のある大学生の補強をし、決勝で函館大学を圧倒して優勝しました。

唯一準決勝での旭川選抜が最後まで食い下がったことは評価でき、立ち上がりに札幌のシュートミスが続いていた時、旭川がもう少し丁寧に攻めて、点差を広げておくことができれば違った展開になっていたのではと、今になって悔いが残るゲームであったと思います。それにしても4Q残5分、73-74で旭川が逆転に成功したことは立派なものでした。その後のタイムアウトが適切であれば、もう少し接戦が続いたように思います。結果86-76でした。

昨年より函館選抜は『函館大学』を軸にして参加し、今年度は南空知地区が『岩見沢教育大学』を地区代表として出場してきており、成年女子の競技の幅の広がりを感じます。大学単一チームでの参加は、練習量も豊富にでき、チームとしての緻密さを大いに発揮できることにより、優勝への可能性も十分にあります。また成年女子は道内に実業団チームが無いだけに、大学生の補強次第でチーム力が大きく変わるのが現状かと思えます。

成年男子は予想通り、宮田自動車の単独チームでの参加である札幌選抜と、旭川キシイを軸とした旭川選抜の対決でありました。全道実業団春季大会と道民大会3連覇を達成しキシイであっただけに、旭川が有利と大方の予想でありましたが、札幌には挑戦者としての勢いがスタートからあり、旭川が受けにまわってしまいました。1Q出だしから札幌のゾーンディフェンスが功を奏し、旭川がオフェンスのリズムをつかめないままズルズルとゲームが流れてしまいました。2Qでは札幌のディフェンスの圧が強くなり、インサイドも機能しはじめたのに対して、旭川は内角がないだけに外のシュートが落ち出すとやはりこういう展開になるのでしょうか。札幌⑩下澤のアウトサイドと⑪千代のインサイドの活躍が光り札幌の圧勝に終わりました。

札幌と旭川以外は各地区のクラブチームが主体となり、それぞれのまとまりを見せ、好感の持てる試合が多く見られました。クラブチームの選手は来月に苫小牧で行われる全道クラブ選手権に向け一層の健闘を祈っています。

少年女子は札幌、旭川、帯広、函館柏稜とシード通りのベスト四でした。今大会はインターハイベスト8に進出した山の手高校を軸にした札幌選抜が、速さ高さシュート力全てに優り、全試合100点ゲームという圧倒的な強さを見せての優勝でした。札幌はガード町田(12)、インサイド本川(13)の2年生が安定しているだけに絶対的な力を感じます。

準決勝で旭川選抜を下した帯広選抜は、インターハイ道予選会での雪辱戦の思いがあるのかスタートより、切れの良いオフェンスを展開し、練習してきたことが良く見えた試合でした。帯広も2年生を主力としてのチーム作りなので、来年の戦いにも期待できると思います。

少年男子は札幌、旭川、函館、北空知がベスト4に上がりました。北空知には田森氏が久しぶりのコート復帰で、海星高校を主体とする室蘭選抜に快勝しての入賞は喜ばしいことでありました。2回戦で旭川選抜と対戦した帯広選抜も帯広工業⑭松村、⑮稲石を中心として善戦をしていました。函館選抜は例年力のある選手を要し、今大会はシューター⑯中村を中心として、オフェンス能力の高さは札幌をしのいでいるかと思われました。今回も昨年同様旭川との接戦になりましたが、ゲーム運びに一朝の差がある旭川が、技ありの勝利であったと思います。

## 釧路インターハイ予選に続き『小よく大を制する』

### 決勝戦 札幌少年男子選抜 vs 旭川少年男子選抜

さて決勝戦、札幌選抜は全道選手権を制した大麻高校を軸として、恵庭南、東海大四を容した万全の布陣に対して、旭川選抜は旭川西高校と旭川工業高校の2チーム単独単位でゲームを進行したことで大きな話題を呼びました。

旭川選抜は旭川西高校と旭川工業高校のそれぞれのスタートメンバー5名をミックスせず、タイプの全く違うチームのそのままの味を引き出そうということで、ツープラトン方式で試合に臨みました。旭川西高はインターハイ出場後、国体に向けての遠征に入り、また旭工も時期を同じにして遠征をしており、試合前日に宿舎で合流という状況でありました。合同練習を一回も出来ないまま大会当日を迎えましたが、結果的には、それぞれがチーム練習に没頭することができ、両校コーチの責任も分担もはっきりし、選抜選手に気を使うこともなく、ぶれの少ない練習ができたようです。

昨年の旭川選抜チームも、旭工の3年生を主体にしながらも日下部コーチが指揮を執り、旭工の選手の気質も理解しており、また現在の旭西の3年生も昨年よりベンチ入りをさせ、経験を継続させたことも、今回の結果につながった一つの要因と思います。

ゲームスタート旭西の5名で始まり、旭川ペースで進めるがインサイドの高さを生かして札幌が逆転し、主導権を握ったかと思いきや、2Qの旭工の5人は札幌の高さをもろともせず果敢に攻め続ける。ちなみにインターハイ道予選のスタートメンバーの身長が174cmであったのが、今回はより一層小さくなり171cmでした。激しく動き回るディフェンスとオフェンスリバウンドに何回も飛び込み奪取する姿に会場がどよめき、大きな声援を益々受けて、札幌を7分間ノーゴールにしたことは圧巻でありました。結果的には札幌の2Qのゾーンディフェンスが、旭川にゲームをコントロールされる原因となったように思います。3Qでは旭西の④佐々木を中心として効果的な3pをまじえて63-41と突き放し、4Q旭工5人、とどめは試合巧者の旭西5人で締めくくり、追いつがる札幌に、旭西エース④佐々木が連続3pで勝利を決定づけた会心のゲームとなりました。

釧路の湿原で展開したインターハイ道予選会の激闘が、更に江別の体育館で再現された状況でした。旭川の両チーム共、選手の役割分担がはっきりしており、シュートセレクションの確かさは普段の練習のたまものといえると思います。また西高の残り3分のゲームの仕上げの巧さ、選手の攻めどころの正確さ等、大いに評価するところでもあります。また旭工のガード⑤岡音の頑張るプレースタイルも素晴らしいもので、見ているものに清涼感を与えます。またそれぞれのコーチと選手との一体感が滲み出ているのを感じることが出来る今回の旭川選抜チームでした。国体本戦では、また違ったチーム編成で北海道選抜チームを組み、戦いに臨むものと思いますが、一層の健闘を祈りたいと思います。

私の側で決勝戦を見ていた工藤晃司先生（今年から指導者育成委員になりました）が旭川の小さい選手を見て『日本もこうやって戦えばいいのにね。』とぼそっと話していたのが印象的でした。

選抜チーム編成にあたっては、軸となるチームを持つことがやはり必要であると思います。特に我々は得点能力だけを重視してエントリーする傾向があるために、『ホームランバッターばかり揃えて、送りバントをする選手が居ない』チーム編成になりがちです。その結果、行き当たりばったりのオフェンスが多くなるためにオフェンスバランスとシュートセレクションが不安定になり、そのことが次のディフェンスに影響をおよぼすように感じられました。

本年は成年女子が都道府県対抗です。他はブロック対抗であり、1回戦から強豪との対決が予想されますが、北海道の代表として更なる競技力の向上も目指し、あと1月に迫る本番新潟に向けて準備をして頂きたいと思います。

以上

(別の話題)

## この夏、山形での出会い

この夏、私は旭川医科大学のコーチをしている関係で、山形県天童市で開催された『東日本医科学学生総合体育大会』という医学生だけの大会に参加してきました。関東以北35大学が集まるといっても大きな大会であり、5日間日程の大変ハードなトーナメントでした。結果は幸丸政実先生率いる北大医学部は準優勝、旭川医科大学は4位とベスト四に北海道の2大学が入る健闘をしてきました。

さてその山形での話なのですが、

大会前日の練習会場をお願いした所は、名門山形南高校でした。その学校を指導している細谷尚寿先生と親交があり、その縁でお借りをしたわけです。彼は昭和58年度の全国選抜優勝大会に東北ブロックの代表になり、山形県下NO1の進学校である山形東高校の主将として出場してきました。そして当時の監督が、彼の父親で山形県バスケットボール界の重鎮である名将細谷寿守先生であり、親子鷹のデビューで大変話題にもなりました。

私の旭川工業高校も初出場に参加した大会でしたので、初出場同士大いに盛り上がった記憶があります。現在は退官され悠々自適の70数歳まだまだ現役時代の眼光の鋭さを持っておられました。当然その夜は25年振りの再会を確かめつつ、細谷親子と一献傾けてのバスケット談義高沸、話しが進むにつれて、細谷父の昭和53年の山形インターハイの話題にさかのぼりました。地元インターハイでの出場権を得た細谷寿守監督率いる山形東高校は、ベスト四を狙うべく意気揚々と一回戦を迎えたそうです。そしてその相手が当時まったく無名であった『沖縄県辺土名高校』であり、彗星のごとく現れて3位入賞を果たし、特別賞も受賞した平均身長166cmと当時でも信じられない程のコンパクトなチームでした。その運動量は半端ではなく、入れども入れども入れ返され、今でも信じられない120対110点代の高スコアでの初戦敗退という衝撃的な試合であったそうです。

私もやっと全道大会に初出場できた年であり、指導者としては駆け出しの時代でしたが、辺土名高校にはとても新鮮な感動を受けたことを今でも忘れられません。ハイソックスが流行していた時代に、ただ1チームだけ短いソックスをはいて走り回っていた選手達で、激しく動き回るためには短いソックスが適していると、その後多くのチームが真似た時期がありました。代表する選手には金城バーニー先生（現在北中城高校）がおり、当時のコーチは新任の安里幸男先生（現在未来科学高校）でした。能代工業で加藤廣志先生に直伝して頂いたというバスケットボールを、最も忠実に表現したチームでもあったと聞いています。

その夜の細谷先生との再会は、『温故知新 以テ師タルベシ』そのものでした。当時の試合の様子やチーム作りのノウハウを聞かせて頂き、貴重なひと時を過ごすことが出来ました。有難う御座います。

【短いソックスの後日談】今年の5月のキャンプにバーニー先生に会った時にそのソックスの話題になり聞いたところ『みんな貧乏で買えなかつただけ（笑）』でした。

### もう一つの出会い

細谷親子との出会いの翌朝のこと、山形市内で宿泊をしていたホテルの近くに霞城(かじょう)公園という城跡があり、散歩でぶらぶらしていたところ、何とそこで発見したものは、昨夜話題になった昭和53年の山形インターハイの主会場である『山形県民体育館』ではありませんか！当時の月刊バスケットボールの表紙を飾った体育館と、開会式前選手集合同期であった駐車場があり、かなり老築化が進み当時の豪華さは失っていましたが、その風貌と威厳はまさしく当時のままでした。

『ここで沖縄辺土名高校は暑い夏を戦ったのか』と考えひとしおの山形県民体育館との出会いでありました。

小さなチームには限度があります。しかし可能性は無限であると信じ、小さいことを負

けの理由にしたくないという多くの指導者が、今日も厳しい練習をしている事と思います。

日本の著名な多くの指導者は全て『高さへの挑戦』を志し、平面が立体を制する努力から実践し続けた方々です。この体育館を見ながら、指導者としての努力の無限さと尊さを再認識した山形でもありました。

H B A（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会